震災が問う社会と「場」

大山直美＝構成
奥山淳志＝撮影

対談

谷直樹 Tani Naoki
［大阪くらしの今昔館館長］

三浦史朗 Miura Shirō
［構匠、㈱三角屋取締役］

災害が多発する近年の日本では、被災地での復興をはじめ、まちづくりのあり方が根底から問われているが、まちの歴史や文化を継承した豊かな生活空間＝「場」の再生はいかに進められてきたか。大阪くらしの今昔館で館長を務め、上方の建築文化・生活文化を研究する谷直樹氏と、数寄屋建築の手法を用いて精力的に東北の復興に携わる三浦史朗氏に、今後、地域・社会を再起動するための「場」づくりに必要な視点についてお話をうかがった。

京都に本拠を置く三浦さんが縁あって設計した㈱気仙沼観光タクシーの新社屋にて。谷さんは気仙沼に今後の大阪のまちづくりのタネを見つけに来たと語る。

被災地で発見した自分の新しい役目

谷　今回の対談を行う場所として、三浦さんの手がけた建築がある候補地のなかから、ぜひ気仙沼に行きたいとお願いしました。大阪を拠点とする私としては、阪神・淡路大震災のときにいろいろ思うところがあったからです。

当時、私が主査をしていた日本建築学会近畿支部の建築史部会では、昭和初期に建てられた数寄屋風の邸宅など、阪神間の歴史的建造物の被害状況を手分けして調査したんですが、構造の専門家が倒壊の危険があるというレッドカードやイエローカードを貼ると、貼られた所有者はもうアカンと思ってしまう。僕たちがいくら、これは歴史的に意味がある大事な建物で、なくなってしまったら二度とつくれないと話しても、命に関わるのでこわいから建て替えるとおっしゃる方が大半で、無力さを感じました。芦屋の重厚な邸宅が軽いプレハブの住宅に置き換わって、はたして数十年たって落ち着いた街並みになるのか。まちというのは馴れ親しんだ街並みが徐々に変わっていくことによって深みが出ると思うので、途中で断絶してしまったのは非常に残念です。

それだけに、三浦さんがどんな思いで東北で新しい建物をつくっているのか、その建築家としての矜持をうかがうことが、これから自分が大阪でなすべきことのヒントやエネルギーになればと考えたわけです。

三浦　僕が最初に気仙沼に来たのは、震災から約半年後で、以前からお付き合いがあった糸井重里さんに「距離が離れたところにいても現地で必要なものがわからないから、ひとまず現地に御用聞きに行こう」と声をかけていただいたのがきっかけです。その直後に縁あって出会ったのが気仙沼観光タクシーの社長、宮井和夫さんでした。初対面で10分ぐらい話しただけで「家を建ててほしい」と頼まれました。僕のことも三角屋も誰一人知らないまちに来たことで、自分の新しい役目が開けた気がします。この6年間に気仙沼で10件のプロジェクトに携わり、今も2件が進行中です。

谷　ご自宅はどちらに建てられたんですか？

三浦　もとの家は海のそばにあって津波で流されたので、新たに山の方の土地に建てました。土地の選定に約3年かかりました。宮井家が今後代々住むにはどんな場所がいいか、会社やまちとの距離を考えると選択肢は意外に少ない。自分は家をつくるプロの仕事をするうちに、知らず知らず土地を選ぶプロにもなっていたので、この土地であれば健康的ないい家が建つというのは感覚的にわかります。通例では不動産屋の仕事ですが、実際にはそういう判断はしてくれない。被災地での家づくりの経験から、これは今後さらに求められる職能になりうるなという発見がありました。

谷　そこまで含めて一緒に建物がつくれるというのは、大変だけど建築家冥利に尽きる仕事ですね。こちらの社屋の方は、鉄筋コンクリートの人工地盤の上に木造の建物群が建っていますが、この発想はどこから来たんでしょう？

三浦　これはもともと、気仙沼市と隣接する岩手県陸前高田市の集落をどう再建するかを考えていたときに構想したものです。そこでは12mの高さに土を盛って、その上にまちをつくろうという計画が持ち上がりましたが、それではものすごい量の土が要るし、空間としては何も生かされない。それより、現代の技術を使ってまず安定した骨格

右は気仙沼観光タクシーの社長、宮井和夫さん（写真左）の自邸。建築設計だけでなく、土地探しから庭づくりまで三浦さんが担当。「三浦さんを信じ、すべて任せることを突き通しました」と宮井さん。

新社屋の中庭から2階を見る。シンボルツリーはなんじゃもんじゃの木。

をつくり、なおかつ車と人を2層に分けることができないかと発想したんですが、結局実現には至らなかったため、ずっと温めていたんです。

谷　なるほど、まちづくりのモデルを縮小して当てはめたんですか。タクシー会社は広い駐車場が必要だから、2層の構造はちょうど理にかなっていますね。

目に見える形で被害を建物に遺す

三浦　実は最初の年は三角屋の利益のうちから、ある金額を日本赤十字社を通して被災地に寄付したんです。でも、何にどう使われたかもわからず、自分たちが稼いだ大事なお金が消えてしまったような感じがしました。それで、まず自分が動こうと思い、月3日は東北にくることに決め、前年寄付したお金と同額を、自分が関わる建物の工事費の一部に充てることにしたんです。例えば、陸前高田の八木澤商店の新社屋では、外壁の側面を全面「なまこ壁」にしましたが、あの壁の施主は三角屋です。歴史ある八木澤商店の佇まいを少しでも再現することが、将来にわたりまちにとって意味を持つと思ったので。

谷　普通は会社として貢献するか、個人としてボランティア活動に参加するというふうに分かれがちですが、会社と個人の両方の社会貢献をバランスよく実践なさっているんですね。そういう会社経営のしかた、お金の生かし方があるのかと、非常に感心しました。

三浦　ともかく何もなくなってしまったまちなので、お題もむずかしく速度も必要で、100年ぐらいかけてやることをギュッと5年ぐらいに凝縮して体験させてもらった感じです。

谷　それほど充実感があるとなかなかやめられないでしょうね。建築は完成時だけでなく、その影響が何年にも及びますから。きっと三浦さんの仕事に触発された職人も出てくるし、ひょっとしたら建築家のなかにも、これを超える仕事をしなければと思う人も出てくるかもしれない。そういうまちの記憶につながる場の原点をつくられたんだと思います。

まちづくりに建築家の個性は要らない

谷　その土地の歴史や文化をどう残していくかは、地域によっても違ってくると思います。例えば、同じ関西でも大阪と京都ではだいぶ違う。梅棹忠夫先生がおっしゃっていましたが、「京都は外からきた人が自分たちのルールに従わないと排除するが、ルールに倣えばとても住みやすいまちなんや。ところが、大阪人はサービス精神旺盛で、外から来た人に合わせてしまうので、大阪の文化の真髄がだんだん薄れてしまう」と。

　私が館長を務める「大阪くらしの今昔館」を最初にどう運営しようかと考えたときにも、大阪らしさを伝える博物館で展示する価値があるのは、大阪の「人」ではないかと思いました。そこで、

三浦　このタクシー会社の社屋に関して、もう一つ付け加えると「被害を建物に遺す」ことは僕の大切にしていることです。建物は人の一生よりはるかに寿命が長いので、ここはどういう場所かを目に見える形で遺そうと思ったんです。この地域はいわゆる津波のような勢いはなかったけれど、じわじわと水位が上がり、地上2・5mまで水に浸かりました。本来はそういう場所に建物をつくるべきではないですが、物事はそう簡単にはいかないので、被害があった敷地を再生するのであれば、かつての被害を建物にとどめておくことは、被災地で役目を担った人間として絶対にしておかないといけないと思いました。本当は周辺の建物もみんな同じように2・5mの高さに人工地盤をつくって2階にデッキを設けてくれたら、よりまちの記憶も残り、まち全体がつながるのにと思いますが、現実はなかなかそうはいかないですね。

今、ボランティアの「町家衆」と呼んでいる人たちに、あの空間の中で自由にお客さんをもてなしてほしいとお願いしたんです。開館当時からいらっしゃる86歳のボランティアが着物を着て薬屋の主人になりきって、「昔のへっつい（かまど）の火はこうやって焚いたんや」と話すと、お客さんにすごく伝わるんですね。

三浦　気仙沼の人たちも本当に温かく迎えてくれる人たちで、もう「ウェルカムの塊」みたいなんです（笑）。何もなくなったはずなのに、いつもこちらが満腹で帰るという、このギャップに毎回感動して帰っていく。

谷　昨日今日と三浦さんが手がけた建築を見て回りましたが、建主の皆さんはあれだけの被害に遭ったら、将来への展望を失った時期もあったと思うのに、自分たちでやっていかなければという気持ちがとても強い。それは空間やデザインが持つ力も大きくて、形があるというのはすごいことだと思います。三浦さんのようにいい仕事をすれば、ちゃんと次の展望が拓けるんだなあと。今さらながら建築の力を再確認する思いがしました。

三浦　特にまちづくりを考える際、建築家が持ちがちな「作品をつくる」という意識は邪魔です。きれいごとではなく、この社屋も自邸も宮井さんの作品であって、僕はそれを長く持たせるために雇われたにすぎない。そういう立ち位置を誤ると、その場所らしさや住む人らしさは全然とどまらないんです。

　そもそも今の建築家の多くは、新たにデザインすることと、過去や周辺から参照して持ってくるべきことの線引きをまちがっているんじゃないかと僕は思っています。新たにまちの骨格をつくるには、何か共通のデザインをベースにした建物を考えるべきであって、そこに建築家の天才的なセンスは要らない。それは内部で発揮すればいいので、外観はある意味、コピーしやすい状態でつくる。町として、景色として、いかに全体感をもった意識でつくれるかがこれからのプロの生き方ではないかと思うんです。

谷　確かにその土地が持つ共通の建築デザインを生かして、まちをつくるというのはとても大事なことです。この周辺のまちの復興を見ても、隣同士、まったく縁のないデザインで、どこの都市にもあるような建物が並んでいるのは残念ですね。今、三浦さんがおっしゃったような意識は最近の建築家のなかでは広がりつつあるんでしょうか。

三浦　広がらないですね、僕もはっきり言って変人ですから（笑）。大学院まで出て、大工のもとへ修業に入ったのは200人中数人でしたし。

谷　私も大学の建築学科で、建築史を専攻したのは90人中1人でした。当時は高度経済成長の後期で、学生の大半は建築設計や都市計画を選びましたから、私が歴史をやりたいと言ったら、先生に「君はちょっと体が悪いんか」と言われたほどです（笑）。お話を聞いてると、三浦さんはすごく職人魂を持ってらっしゃいますね。ものづくりのまち・京都で生まれ育ったから、そういうDNA

上／広いデッキのある2階。鉄筋コンクリートの人工地盤の上に、木造の建物が建ち、緑が茂る。
下／道路側外観。建物の構成が一目瞭然。カラフルな車体は地元の子どもの絵をあしらったもの。

ともに大学で建築を学びつつ、工務店に修業に入った三浦さんと、建築史を専攻した谷さんは、お互い異端児だったと意気投合。京都人である三浦さんから、大阪には日本が進むべき未来のタネがあるとエールを送られ、大阪人の谷さんは満面の笑みを浮かべた。

を受け継いでるのかなと思いました。

三浦　僕が中村外二工務店で日本建築や数寄屋を学ぼうと思ったきっかけは、大学院のときに久住章さんというすぐれた左官と出会ったことです。もちろん、中村外二さんも天才的な職人でした。よく建築家は指揮者だといわれますが、そうではなく大工や左官と同じように、職能としての設計をやるプロになって、優秀な職人たちのメンバーに入りたいというのが目標でしたから、そう言っていただけるととてもうれしいですね。

学んで砕いて 自分なりの数寄屋をつくる

谷　三浦さんは数寄屋をどんなふうに捉えていますか。

三浦　僕は今、数寄屋というのが和のステレオタイプになっているのが気に入らない。数寄屋は本来「数寄者」から来た言葉で、住まい手や使い手の個性を最大限引き出すための方法だと思います。つまり、数寄屋には多様な方法があるべきで、今後は数寄屋という手法を使って、将来その場所のスタイルになるようなものをつくりたいと思っています。

　かくいう僕も昔、苦い経験をしたことがあります。依頼を受けて、ある地方の重厚な佇まいの街並みの一角に数寄屋の店をつくったんですが、繊細な数寄屋建築は京都という場所には合うけれど、そのまま他に持っていった瞬間に下品に見える。同じ失敗は二度と繰り返すまいと思いました。それ以来、その場に合ったものをつくるということを、より心がけて取り組むようになりましたね。とはいえ、洗練された質の高い数寄屋建築を一通り学んだことは非常に大きいとは思っています。

谷　数寄屋とは桂離宮とか茶室のことだと日本人は考えがちですが、利休が出て200年の間に形式化してしまったところに悲劇があるのかもしれません。建築家のなかにはちゃんと数寄屋を学ばずして「おれは数寄屋をつくった」と言っている人が少なくないですが、三浦さんは中村外二さんのところで厳しく数寄屋を学び、それを1回砕いていきながら、自分なりの数寄屋をつくっていて、それこそが本当の意味での数寄屋だという気がします。誰もが知っている形でないと数寄屋じゃないと批判する人もいますが、そんなこと言っていたら文化財としてしか残らないし、現代や未来に継承していくのはむずかしい。

三浦　数寄屋はもともと新し物好きの人が、いかに伝統的なものに新しいものを採り入れようかとして考え出されたスタイルです。今、アジアの人たちがなぜ数寄屋に憧れるかというと、過去と現代が断絶せずにつながっている点に可能性を感じるからでしょう。だから、僕は数寄屋を単にクラシックだとは思っていません。僕が中村外二さんのもとで学んだのは亡くなるまでのわずか3年半でしたが、幸い三角屋にはそこに30年いた職人も含め、数寄屋のベースを知るメンバーが大勢いますから、その環境は強みですね。

　今、三角屋では施主に合わせて材料を選んだり、建築だけでなく庭の骨格まで設計者が考えたりと、ひとまず全部受けるところから始めています。建物と共に庭をつくるため、三角屋がストックする材料の半分は石材です。

谷　きわめて東洋的なつくり方ですね。

三浦　そうなんです。今は建築と工芸、空間としつらえにも境界線がありますが、本来は一体で、場合によったらそこに座る人の着物まで一体感があってもいい。どこに境界線を引くかは、時代に合わせて引き直していかないといけないんじゃないでしょうか。

谷　建築は本来、風景からインテリアまで含めた総合芸術なのに、それを切り分けてきたのが近代かもしれません。かつて大学の工学系の建築学科では、鉄筋コンクリートと鉄骨しか教えず、木造は劣ったもののように扱われてきましたが、今ようやく見直されています。三浦さんは確かに異端で、自覚はなかったのかもしれないけど、いちばん最先端を読んでいる感じがします。それがきっと未来のタネになっていくのでしょうね。

外からの視点に 日本が目指す方向がある

三浦　未来のタネということで言うと、今、日本建築や数寄屋が好きなアジアの人たちが増えていて、今昔館も外国人客がとても多いそうですが、あの人たちが憧れるものに、僕たち日本人が目指すべき方向や方法がたくさんある気がします。

谷　今昔館はインバウンド需要が非常に増えて、今や年間57万人の来場者のうち、半数以上が外国人です。彼らの感想を聞くと僕自身も学ぶことがあるし、あの場で日本や大阪の良質な文化をちゃんと伝えていくことで、お客様に何かを感じてもらい、それがまたタネとして広がっていくのではないかと期待しています。

三浦　いま「体感」として歴史を感じる場所がほとんどないから、そういう意味では今昔館は建築学科の学生も見に行って学ぶべきだなと思います。

谷　体感というのは大事なことですね。今、茶室を体感しようと思っても、なかなか気軽に入れるところがないし、大学生でもマンション育ちだと、床の間や畳すら知らない人もいる。今昔館の座敷に連れて行くと、みんな突っ立ったままで「天井が低いなあ」と言うんです。そこで畳に座らせて、座った高さに合わせて天井や床の間の掛け軸の高さが決まっているんだと説明すると、やっとわかる。今昔館はできるだけ空間を体感することで、日本の伝統的な住まいのよさを知ってもらいたいと工夫を凝らしています。

三浦　僕自身も京都人なので、正直、大阪はごみごみして苦手なところがありますが（笑）、考えてみれば茶道は堺で生まれたものだし、何かが生み出される力のある土壌が大阪にはあると思います。そこから派生して非常に洗練されたものが京都にとどまっているので、京都の役目は今後も続くでしょうが、もう一度、大阪の豊かな土壌や賑わいのなかから生まれてくるものが育っていかないと、日本の未来はないと思います。

谷　力強いエールをありがとうございます（笑）。大阪は柔軟すぎて伝統を絶やしかねない土地柄ではありますが、逆を言えばいろんな実験がしやすい場でもあるので、私は今後、今昔館を通じて行った多様な実験を理論化、普遍化することによって、まちづくりの役に立てるよう、博物館の世界でやれることをモデル化したいと考えています。

　例えば、高齢者が今昔館に来ることは、認知症のリハビリになる。回想法といって、昔のことを思い出すと頭が活性化するんですよ。このように、博物館は実利的にも意味があるし、伝統的な空間が持つ力をもっと一般の人にもわかってほしいですね。

　実際、人は年を取るほど、引っ越しただけで呆けたりします。記憶の中の風景が連続していることは、それほど大事なんです。震災復興でも、劇的に空間が変わってしまうでしょう。いくら鉄筋コンクリートの近代的な建物で防災面は大丈夫でも、東京の設計者が机上で設計したものを一方的に提案するだけではダメだと思う。やはり、三浦さんのように現地の調査をしっかり行ったうえで、地元の職人さんの力を借り、その人たちを励ましていくことが大切です。そういう仕事を、私もやっていきたいと思っています。

谷直樹
たに・なおき
大阪くらしの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）館長。1948年生まれ。大阪市立大学名誉教授。京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。専門は、建築史・居住文化史・博物館学。今昔館の先駆的な企画・運営で日本建築学会賞および同教育賞などを受賞。著書に『町に住まう知恵――上方三都のライフスタイル』などがある。

三浦史朗
みうら・しろう
構匠、㈱三角屋取締役。1969年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科・大学院卒業後、中村外二工務店設計部に入店。退店後は㈱とふうを設立。2005年、「三角屋」に改名し取締役を務める傍ら12年には㈱六角屋を設立、代表取締役を兼任する。東京糸井重里事務所の内装や「気仙沼のほぼ日」など、多数の設計施工を手がけている。